

Challenging but Rewarding

～ブラジルのフルーツ雑学～

みなさんは、ミックスナッツで定番のカシューナッツが、樹にどのように生るかご存知でしょうか？ 私はブラジルに住んで、初めてそれを知り、驚かされました。そんな駐在中に学んだ、フルーツの雑学をご紹介します。

カシューナッツ（葡：Castanha de caju）は、南米原産のウルシ科のカシュー（葡：Caju）の種子にあたる部分です。カシューは、果実の構造が変わっていて、果肉にあたる部分の先端に、種子にあたる部分が付きます（写真1）。普段私たちが日本で目にするのは、この種子にあたる部分をローストして、殻を取り除いたものになります。



写真1.

カシューの生産地であるブラジル東北部に行くと、ホテルの朝食でもカシューの生果を見かけます。果肉にあたる部分（葡：Caju 英：Cashew apple）は、そのまま食べることができて、柔らかくジューシーで熟れた柿のような甘さがあります。果肉部分は傷みやすく、流通には適さないため、ジュースに加工されることが一般的です。カシュー100%ジュースだと、甘味が強すぎるのか、リンゴとのミックスジュースの方が定番の印象です。

一方で種子の方は、ウルシ科ゆえにウルシノール類縁体を含み、生のままだと、毒性があり食することができません。高温処理をすることで、これら成分を除去できます。カシューナッツはブラジル国内どこでも売っていますが、お土産として買い求められるならば、サンパウロ公共市場（Mercado Municipal de São Paulo）がお勧めです。1933年建造の歴史あるマーケットには所狭しと、フルーツ、ナッツ、ハム、魚などの専門店が並びます（写真2）。



写真2.

ブラジル駐在中は、バナナに次いでパパイヤ（葡：Papaya）をたくさん食べました。パパイヤはブラジル国内どこでも安価に売られていて、熟したものは万人受けする味だと思います。

パパイヤの生産者を訪問すると、同じ品種でも、丸い小ぶりの実をつける樹と、長くて大きな実をつける樹が混在してます。実は、パパイヤは雄花をつける雄株、雌花をつける雌株と、両性花をつける両性株があります。両性花は雌花と比べると、小ぶりで細長く、雄花から変異したものであるため、周り

に雄蕊を持ちます（写真3）。



写真 3.

これが受粉して実をつけると逆転して、両性花の方が細長く大振りの果実をつけます（写真4）。



写真 4.

大きな果実でも、大きくても形が不ぞろいな両性花の果実は、輸出用に使えず、安い国内マーケット向けになってしまうため、生産者には歓迎されていません。確かに、雌花の果実は、大きさこそ小さいものの、粒ぞろいが良いです。（写真5）

それならば、輸出用に高値で売れる雌株だけ栽培すれば良いのではと思いきや、雌株⇄両性株間の分化のコントロールは、まだ栽培上の課題のようです。

ブラジルならではの創意工夫には驚かされることも、しばしばありました。ブラジル東北部のサンフ



写真 5.

ランシスコ側流域には、生食用のブドウ（葡：Uva）の一大生産地があります。雨が少なく、年間を通じて温暖で日照の多いこの地域では、灌水をコントロールすることで、2年間で3回ブドウを収穫しています。収穫後せん定をして、一定期間水を制限した後、再び灌水すると、新梢の伸長が始まります。写真6は、18度を超える糖度があり、熱帯の気候に適応した Vitória というブラジルで開発された品種です。

今回紹介したもの以外にも、ブラジルのフルーツたちは、美味しいものばかりなので、お越しの際は、是非ご賞味下さい。（RK）



写真 6.